

昭和二十四年七月二十三日
昭和四十二年七月十五日
第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第二一三号）

慈光

第十九卷

第二号

目次	次
わが懺悔の記 (上)	信仰とは (二)
成人する孫に	生死の問題 (下)
亡き母の一周忌を迎えて	
池山栄吉 (1)	
花田正夫 (4)	
向島諦宣 (9)	
松村繁雄 (15)	
三上孝基 (18)	

信仰とは

——ただ念仏して

(二)

池山栄吉

前回は大体、聖人の入信の経路からその告白という方へ話がだん／＼進みましたが、どうもこの信仰にはいるという過程に於いてすこぶる大切な条件、殆んど必須的な制約とも見なすべきは、信仰上充分に信頼し得べき人のみつかることでありませぬ。歎異鈔の序文にも『有縁の知識によらずんば、いかでか易行の一門に入ることを得んや』とあり、また口伝鈔には聖人の言葉として『このたびもし善知識にあいまつらば我等凡夫かならず地獄におつべし』とあるに徴しても知れましよう。有縁の知識、或は善知識というのが、要するに、この信仰上充分に信頼し得べき人のことでありませぬ。

獲信の前提

親鸞聖人にしてみると、法然上人がすなわちその人でありました、絶対の信頼は自見を取り扱います。親鸞聖人が初めて法然上人に会つたときの心持は、まるきり白紙であり、真空でありました。だから、よきひとの仰せが、その

あり、両者相待つて、そうしようと思わずに、そうなつたのであります。体験ばかりあつても信頼が足りない、蓋がとれず、信頼があつても体験が具わらないと、底がもります。

地獄へ迎えに来て下さい

私などの話を数回きかれて、それで信仰にはいるかたがだん／＼ありますが、大抵の場合、信頼を予想するようです。二三年前のことでありました。石川県の或地方の未知の人から手紙がきました。ひらいてみると、まだ御目にもかかつたことのない先生にいきなり手紙を差上げて失礼でございますが切羽つまつてのことゆゑ御宥恕を願います。

私は当年二十三才の青年で、目下不治の病に冒されて床についておるものでございますが、先般或る病院にはいつて居りましたとき、或人が先生のおかきになつた『絶対他力と体験』を貸してくれましたので、読んでるうちに、切実な求道の念が催おしてきて、どうぞたしかな信仰を得たいと、しきりに工夫してみました。さて得られませぬ。

と思うと急に地獄がこわくて／＼たまらなくなりませぬ。先生一体地獄とはどんな恐いところでしょうか。しかし私はもう決心しました、私は遠からず死んで行きます、そして地獄へ落ちます。が先生は決して地獄へ落ちるかたではないと思ひます。そこで先生にひとつ折入つてお願いが

まゝにうつり、上人の信心を一杯にうけいれることが出来たのです。

一人の心持、すなわち内的態度というものは、内にみずから反対理由、または反対動機を蔵していかないかぎり、必ず相手の心持、すなわち内的態度を、それがあつてまゝに感受するはずのもので、例えば人と並んで歩く際、話に気がとられると、おのずから歩調が一つになるように、無心を以て人に接するかぎり、その人の考え、感じ、思うことが、おのずからわが思想、感情、意思となるのは、本来そうなくてはならぬ心理的傾向なのであります。ひとり信仰のみがその例外をかたちづくる理由はありません。もつとも己を空しうするということは、ただそうしようと思つたからとて、思つただけではそうなるものではない。それはそうならしむべき因縁がなくてはならない。例えば聖人にしてみると、一方に、いずれの行もおよびがたいという内的体験と、他方に、同様の体験を経た有縁の知識の信頼が

あるのです。先生がお亡くなりになつたら、すぐ地獄へ私落ちて待つて居る地獄へ、私を迎いに来て下さいませんか。若し先生がこれを承諾して下さいれば、それ一つをこの世の思い出として死んで行きます。御承諾下さいれば、こんな嬉しいことはありません。と書いてあつて、返事をもとめるつもりでしょう。三錢切手が封入してありました。

それからなお追申として、こういうことが書いてありました。まだお目にかかつたことがないのだから、先生は私の顔をお見知りになつていられない。迎いに来ていただくのに、それで差支はないでしょうか。もしそれでは都合がわるいということでしたら、私の十七の年に、商業学校を卒業した記念の写真があります。それでもよろしければ、お送りいたします。とあつたのです。私はこれを読んで思はず噴き出しました。今でも思うとおかしくなる。がその下から、その愚さの大いなるだけ、それだけその真剣さに打たれたのであります。

平生筆不精の私もさすがにすぐ返事をしたためて出た。すると、また切手附で問い合わせの手紙がくる。また出すまでも。一と月たつたかない間に、都合往復五回に及んだのでした。そして第二回目の来信には写真が添えてありました。私からはその時々思いつきや、尋ねに對

する答を書き送つたのでしたが、その都度おもしろいように手心えがありました、初めのたよりが地獄落の真黒闇とすれば、二度目には、昏さは減つたがまだ深い霧におゝわれてゐる態、三度目には、それもよう／＼薄らいで、何処となく微かな光さえたただよう形、四度目になると、天の一方にうす雲を通して日の影を認め得た趣、終に五回目に至つて、所謂雲霧を排して青天を見る概がありました。そしてこの時には、もう返信の切手はついて来ませんでした。

鯛の頭も信心から

阿闍世王が、自分の犯した罪に責められて、非常な煩悶に陥つたとき、耆婆大臣の勧めに従つて、釈尊の許に赴くにあつて、途中でヒヨツと大地が裂けて、地獄へ吸い込まれるようなことがあつては、という心配から、決して地獄におちる氣遣いなしと思われる耆婆大臣にしがみついて一つ白象に乗つて行つたという話がありますが、この石川県青年も、地獄行のこわさのあまり、阿闍世の耆婆にしたように、私にすがつた信頼が、鯛の頭も信心からで、信仰を促進する因となつたように思われます。

続く

生死の問題(下)

五、菅瀬芳英師と近角先生の筆談

菅瀬先生が癌になられて、言葉を失われた頃、近角先生がお見舞になつて、お二人で筆談されましたが、その貴重な記録を岡山の西本清人様が頂いて居られます。その一節に、近角先生が

「ドウシテケレルのか、行つて見ねば判らねど、飽迄見捨てぬとの御真実が分れば、アナタマカセ／＼」とあります。死に直面せられた菅瀬師の枕頭で書かれたものでありますか、全く先生の平素の御信証、

「して見ようのない者を、飽くまでお見捨てない御真実」を吐露され、その御真実一つで、平常も、臨終も人生手放しの徹底されたお言葉であります。

六、池山先生

先生の六十二の頃、亡くなられる五年前に重病、一時重症に陥られた。その時のことを「仏と人」に、

池山先生とニイチエ

先生はよくニイチエの『超人』を引いて信を語られました。

○「君たちは超人を信ずるといふのかい。超人が何だ。君たちは君たち自身を見出す前に超人をきいたのだ。だからからきし駄目なんだ。世間一般の信者というものがみんなそうなんだ。」

君たち自身を見出す時、超人がそこに現れる」

とあるが、親鸞々々と言う前に自分自身を忘れている人が多い、と。

○「君がたが体験し得るものうちで、一番大きいものは何か。それは大いなる蔑視の時だ。君がたの幸福も、理性も、道徳も、からきしつまらないものになつてしまふ時だ。」

とこう喝破しているが、自分を見下げ果てる時が、私達の体験出来る大いなるものに疑いはないが、ただ見下げ果てただけで終るのでは、悲惨という一語に尽きる。それは単なる価値破壊でしかない。大いなる見下げ果ては大いなる敬い、大いなる受入れの前提、もしくは反面として、はじめて絶大の価値が含まれる。

私はいふ／＼人間の凡そこの世で体験し得るものの中で一番大きいものは何か？それは大いなる受入れの時、念仏申さんと思いたつ心のおこるときである、」と。

花田正夫

自分は今度は駄目かと思つた。今夜はまだこうして息をしているが、明日の朝になると、もう眼が閉じてしまつてゐるのではないかと思つた。そうだ、息は一つしかなかつたのだなど、常には人の氣付かないことに初めて氣付いたような氣がした。然しまだ絶対に死ぬに決まつてゐるとまでは思わなかつた。

若し死んだら——あれやこれやを思えば名残りはつきないが、ままよ／＼俺にはただ念仏がある／＼ベットの傍、見易いところに、近角君筆の

大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、

至徳の風静に衆禍の波転ず、即ち無明の闇を破し、

速に無量光明土に到る云々

の謹録聖訓とある軸が掛かつてゐる。

／＼即ち無明の闇を破し／＼が特に目をひく、ここまでは現在として解すべきだと心証する。……

私の行方は闇である。ことに近く死と面と向つては、真

黒闇の闇である。そこに、その時、忽然として閃く。ただ念仏。私には巨人の腕にかざされた松明としか思われなかつた。実にこの閃きこそ無明長夜の灯炬であり。即ち無明の闇を破し。はその光芒のどく限りである……。

「煩惱の犬は追えども去らず涅槃の月は招けども来らず。とはよく聞くことではあるが、私の。ただ念仏。はそうではない。追えども去らぬ煩惱の持主の私に、招かざれどもつきについて、念のように離れようとするのである。

「随時随処、念頭に浮ぶのである。神秘の呪を捧げて、湖畔にただずむ八重垣姫を繞つて、点々として燃え出でる狐火のように。私はここに袖を捕えて離さぬという撰取不捨の利益、我能く汝を護らん。という御約束の効を体感して、今更のように啞然たらざるを得ない。

と、死の横顔を眺めながらの信味を述べていられますが、六十七才、いよ／＼病勢悪化し、遂にお言葉を失われる前の信味を友子奥様は次のように記して、亡き先生に語りかけていられる。

十月卅一日

就寝前、食間のお菓をとられると静かにお念仏されました。やがてお顔をほころばせて何か囁かれたい御様子なのでお口元に耳をよせますと、ときれ／＼ながら

子の帰りを待ちわびて、あしずりする思いを酌んで「スグキテオクレヨ」と読むのも許されようと思う。「一心正念」も「ただただそのまま」とでも訓じて置けば無難だろうが、一步奥に踏みこんで、一心正念の生みの母、やるせない如来の思召に鑑みて、オネガイダカラと仮名を振つても正鶴を失した見とは云われまい……。

オネガイダカラスグキテオクレヨ、何たる哀切な叫びであるう。帰りにいざ他郷には、停るべからず、矢の如き帰心が子に起るのは、切なる親心が子の心への徹到の成果であり感入の反映である、云々。

古歌に

喚び声が力なりけり旅の空風吹かば吹け雨降らば降れとあります、本願招喚のお声一つ、それがそのまま、ただ念仏と浮び出られての先生の往生でありました。

七、近角先生

福島先生が歎異鈔身説記の中に、直接近角先生から聞きとられたお味わいを次のように述べています。

近角先生は晩年非常にお気の毒でありまして、昭和十二年の秋でありましたか、御長男が廬山の戦で戦死なされました。それから先生の御かくれになりますまで四箇年あま

「何も残るものはない、何も残るものはない、ただ念仏だけが残つてくれる、ただ念仏だけが残つてくれる、偉いこつたよ、有難いこつたよ」

十一月七日

寝台の正面に掛けてある「一心正念直来」の軸をじつと見詰め、やがて「親鸞におきてはただ念仏して」の軸をいかにも満足そうに見入られ、やがて声高らかにお念仏されました。一切の言葉は失われたのに、お念仏ばかり不思議に申されました。——（八日御往生）

さて先生は「仏と人」の中で次のように云われています

「一心」は「た」であり「正念」は「だ」であり「直来」は「念仏」である。

「一心正念直来は」ただ念仏の翻訳と見られる。あゝ／＼一心正念直来／＼ただ念仏……この他に何があるろう。……

「直来」を本願招喚の勅命として、直ちに来れと読むのは当然のことであり、いかにも父としての尊厳さを想わせる響がある。がやさしい／＼慈愛そのものの母親が、我が

り、私は時々東京に参つて求道会館で先生のお話を拝聴しました、お話が一通りすみますと、会館の後の部屋に御入りになつて、そこに私がお目にかかりに参りますと、いつも繰返して私に仰言つたことは、

「今の心境は歎異鈔第九章である。長男の戦死したことが、どうしてもあきらめられぬ」

というお言葉でありました。先生ほど信仰に徹したお方が御子様を亡くされたならば、これを御縁にいよ／＼御信心が深くなり、あきらめて落着いておいでになられそうなものだと考える人もあります。併しそれは理窟というものではありません。やはり人間としての現実はどうでもありません。結局歎異鈔の第九章に落着くより外はないと先生が直接私に仰せられた御言葉が私の耳の底に留つているのであります。

静かに考えて見ますれば、私などは先生のそういうお姿に深く打たれて自分の胸が落ちつくのであります。先生は昭和十六年十二月三日に御往生遊されました。私のために此世では凡夫の御姿を示して、此世を去りたまうては尺十方の無碍の光明に一味の世界に御入りになり、なお私を常住に御導きになります。

私も昨年の夏八月二十二日には二十六歳の娘を亡くしま

した。両親や兄弟に非常によくしてくれました娘でありま
すし、此の娘のことを思いますれば先生の晩年の御心境が
わかるように感じます。先生があきらめられぬ御心をその
ままに打ちひらいて、煩惱具足の凡夫のすがたをお示しに
なつて、そこに大悲の仏陀の真実のいのちを御身の上に受
けたまうて御往生遊ばされた。そこに無限に私をひきつけ
るものがあります。

「信界建現」二十一号（昭和七年十一月発行）に、先生
御自ら次のように述べていられます。

回顧せば昨年、求道会館落成記念日たる十一月三十日に
於いて、凶らずも脳溢血にかかり、危く一命を失わんとし
たるに、九死に一生を得て一週年の今日再び仏前に詣で、
皆様にお目にかかることを得たるは洵に冥加に余る仕合と
存じます……。

私はその当時、病状險悪、いよいよ最後と取り詮めたる
時、一念心頭に浮びたることは、本願力自然によりて自分
はこのまま参らしていただくことは、一毫も疑う余地は無
いが、定めて子供等や信者の方々が悲しみ落胆して下され
ることであろう、出来ることなら、生きられれば結構と思
うたことであつた。

往生はいよ／＼一定と、安心させていただくことが出来る
のである。云々。

と徴に入り細に渡つての御法味を知らされます。私自身
昭和十六年九月に求道会館にお参りした時、会館の後の部
屋に、先生筆の短冊に

跡戻り／＼して迎らん甲斐なきことに心惑いて
を押し、忘れることの出来ない歌として心に刻まれて居り
ます。甲斐なきことに心惑うてやまぬ私を、飽くまでもお
呆れない御真実一つを仰ぐことであります。生死の問題も
ここに闇を破られるのであります。



其時自分ながら存外覚悟がよかつたと思ひ、又周囲の者
も同様に認めたようであつた。然しながら段々快方におも
むき、あとより熟々考えて見るに、其本音は大いに違つて
あることを発見した。自分は思いきりがよかつたが、子供等
や信者の方々のことが気にかかると思つたは、やはり畢竟
自分自身の変形に過ぎなかつた。歎異鈔の「浄土へいそぎ
参りたき心なくていささかの所労のこともあれば死なんす
るやらんと心細くおほゆることも煩惱の所為なり」とある
は此処じや。

其時の心持を口ずさみたのが

「正立入出門 忽為煩惱逸」

の詩句であつた。大そう殊勝そうに子供等が、信者の方々
がと云えど、畢竟長々親しめる苦惱の旧里は捨て難く、名
残惜しく思えども、娑婆の縁つきて力なくして終るときで
あつた。若しや此時御縁がつきたならば、彼土へ参りて、
無上涅槃の証を開かして下さるであらう。

是の如く娑婆にあらんかぎり最後の一念に至るまで、
煩惱具足の凡夫である。仏かねてしろしめして、煩惱具足
の凡夫と仰せられたが誠に有難い。若しこの仰せがなかつ
たらば健気に賢善精進の相を現せねばならぬであらう。然
るに虚仮不実の私を、仏かねてしろしめして下さればこそ
他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと知られて

人生の短さと長さ

青年の目には人生は無限に長い未来なのだが、老人の立
場から見ればそれは非常に短い過去にすぎない。若い頃には
ちやうどオペラグラスの対物レンズを目に当てた時の物
体のように見えるが、晩年には接眼レンズを目に当てたと
きのように見える。

人生がいかに短いかを認識するためには、人は年をとつ
てしまわなければならない。

— ショウペン ハウア —

人間の図繪

沢山の人が鉄鎖につながれて、みんな死刑の宣告をうけ
その中の幾人かが、毎日他人の眼前で絞め殺される。残り
の連中は、自分の境遇も同輩の境遇と同じであるのを見て
ガッカリし果て、痛ましげに顔を見合せながら、自分達の
順番を待っている。

こういう有様を想像して見給え、これが人間の境遇を繪
にしたものである。

— パスカル —

亡き母の一周忌を迎えて

向島 諦宣

昨年十月三十一日、私は若狭小浜の自坊の報恩講を勤める為に帰省した。既に満八十五才の高齢に達していた老母は、一年程前、立ちくらみのため倒れ、机の角で腰を強打して以来、時々軽い心筋硬塞の発作を起すようになり、寝たり起きたりの状態であったが、その日は比較的元気で私の帰りを喜び迎えてくれた。大低月に二回は帰省して母を見舞っていたが、何時も買って帰る「救心」の小さな包みを、その折も「まだあるのに、有難う」と云って押し頂きながら受取ってくれた。その夜は久しく入らなかつた風呂にも「久し振りに入れて貰う」と云って、ゆっくり入浴したのであった。

報恩講は十一月二日、三日の両日、那須行英師を迎えて勤める予定であつたので、翌十一月一日は朝からその準備のため、私も大車輪の活動を開始した。老母もその日は特に気分が良かったようで、朝早くから障子の切り張りやら境内の草取りまでして「無理をされてはいけませんよ」と

精神的には私の大恩人なので、お父様がお念仏を無我に悦んで居られたお蔭で、今私も細々ながらお念仏を申す身にさせて貰つたのですからなあ」とか、また「長男も今何とかかんとか言っているけれども、私自身のあの年頃の気持ち振り返って見ればよく分ることで、たとえ寺を利用する積りで寺を継ぐようなことになるとしても、それが縁となつていつかは本当のことが分つてくれるでしょう」と云うようなことを語つたのであつた。それらの言葉を聞いて母は如何にも満足そうな顔をしたように覺えている。

そうこうしているうちに家内が夕食の準備が出来たことを知らせに來たので、大体お莊嚴も終つたことであるし、後は私がやるからと言つて母を促し、一緒に庫裏へ行つて夕食を共にした。その日は丁度町の老人慰安会の日に當たつていて、正午前から母と私に二人分の折詰めが來ていた。昼食の時、母はその半分を喜んで頂き、夕食の折もその残りを平らげ、なお夕食の馳走にも少し著をつけ、なかなか旺盛な食欲を示した。夕食後いつものように暫らく一緒にテレビを楽しんでから、何気なく自室へ引きあげたのであつた。それから二三分経つた頃、母の部屋から異様な嘔吐するような声が二度続いて起つたので、驚いて「どうしましたか」と叫んだが、何の返事も無い。あわてて部屋にとび込み電灯のスイッチをひねつた所、母は右腕を畳の

注意をした程、明日からの報恩講を楽しみに、何かと立ち働いているようであつた。然し午後になると流石に疲れたと見え、自室で横になって休んでいた。そこへ本堂の莊嚴に必要な机の置き場所がわからず、母に尋ねに行つたところ、自分で見ると言つて、わざ／＼本堂まで出て来て、置き場所を教えてくれ、更に自分で打敷等を出してお莊嚴の手伝いをしてくれた。その間、内陣の余間に座りながら、「私もこの寺の報恩講を勤め始めてから六十数年になるがこの頃ではいつも、これが最後や、と思うて勤めさせて頂いている」と感慨深げに言い、また亡父のことについて「お父様は経済的にはあかん人であつたけれど、本心に心から御法を悦んだお人やつたてなあ」と如何にも懐しげに語り、私の長男のことを心配して「あの子にも少し宗教心があつたらなあ」と言つたりした。

私はそれらの言葉に対して別に気もかけず只仕事をしながら「お父様には本心に経済的には困らされたけれども、上に投げ出して、床の上に仰向けに倒れている。私は母がいつもの発作で気を失つたものと思ひ、すぐ抱き起して「おばあちゃん／＼！」と何度呼んでも応答がなく、固く眼を閉じて、口を少しあけ、額には薄く汗がにじんでいたが、別に苦悶の影も見えない。

「おばあちゃん、こんなことになられるんなら……」と言つて家内は泣いた。すぐ向いの助産婦の家の電話を借りて医師を呼ばせたが、助産婦自身がとんで来て、早速急急のカンフルの注射をしてくれた。併し何の反応もなく既に脈も止つているという。

茫然自失しているところへ、医師が来て仔細に診察し、「苦しんで居られる最中かと思つて來たが、既にこと切れおられる。狭心症の発作で亡くなられたのです」と宣告した。時に午後七時二十分であつた。

かねて医師から、このようなことが起るかも知れぬから十分注意するようにと聞かされていたが、まさかこのような時に、このような形で突発しようとは思つていなかった。もはや報恩講どころの騒ぎではなく、この突発事に対処するため忙殺されることになった。やがて何も知らずに大阪から帰つて來た長男は意外な出来ごとに驚き、老母の枕頭に座して、深く頭を垂れた。四五日前、所用で大阪へ行く長男に対して、母はいつも言つたことのないきつ

い語調で「早く帰っておいで！」と命令するように言った
そうである。

母と共に報恩講のために荘厳した本堂は、打敷を裏返し
て白くするだけで、殆んどそのまま母の告別の式場と化し
た。三日の通夜の折、満堂の弔問の方々に私はお礼の挨拶
旁々母の突然の往生の様子を語った後で、大体次のような
言葉を、涙年らに述べた。「晩年になって母は『私がこの
年迄長生きさせて頂いたのは、本当にお念仏を悦ぶ身にさ
せて貰う為であった。本当に私程仕合せ者はない。今何百
何千万のお金をやるから、その信心を捨てよと云われて
も、よう捨てぬ』とよく申しておりましたが、これは全く
寺に生れ、寺に生活し、坊守として長く如来様の御給仕を
させて頂いたお蔭であります。特に晩年になって念仏の信
仰を深めたようであり、近頃では死の覚悟もしていたもの
と見え『お蔭で私はいつ死んでもよい身にさせて頂いた
が、併しこの上欲を云えば、出来ることなら人様の御世話
にならずに、コロッとして貰いたい。またいつ死んでも
よいけれども、出来ることなら気候のよい時に死にたい。
余り寒い時や暑い時では人様に御迷惑をかけるから』とよ
く申しておりました。ところが不思議にも母の自分の死に
対する念願が見事に実現して、一瞬の内に絶命し、棺は菊
花で蔽おほわれると云うこのようなよい季節に命を終わりました。

お蔭で今日迄私は無事に生き長らえることが出来たので
す。誠に母上は私に取って文字通り法蔵菩薩の化身であら
れました。本当に有難うございました。』それからまた次
のように心に誓ったのであります。「母上がお浄土へ還ら
れた今、母上の荷か負ふされた苦悩を母上に代って荷かうなべき番
が、今度は私にまわってまいりました。これ迄母上に苦悩
の重荷を背負わして来た不孝者の私には、もはや所謂世の
仕合せを私の為に追い求める資格はありません。今後私は
先ず私の子供の為に、命のある限り、御念仏と共に私の業
報に忍従して力の限り働かして頂く覚悟です。丁度母上が
この私の為にそのようにされて来たように。』このように
仏前に誓ったのであります。さて御弔問を頂きました皆
様、母のこの突然の往生が、このように母を生かし、このよ
うに安んじて母を逝かしましたところの真実の信仰に、
若し耳を傾けて頂く機縁の一つともなりますならば、お浄
土の母もどんなに喜んでくれることかと存じます……。」

翌四日午後二時の告別式は会葬者が本堂に入り切れず、
なお多くの人々が境内に立つという程盛大なものとなっ
た。仏前は供花の色さまざまの菊で埋もれており、その間
から母の写真がにこやかに式場を眺めていた。その間、生
前既に本山から頂いて咲枝という自分の平凡な俗名にくら
べて、誠に立派なよい法名だと悦んでいた帰命院釈尼妙恵

た。而も死の前夜風呂へ入って身を潔め、偶然とは申し乍
ら自分で自分の告別の式場の準備まで手伝ったのでありま
す。この点母は誠に仕合せであったと申さねばなりません
が、後に残された我々と致しましては、凡情の悲しさで、
せめて一言でも最後の別れの言葉をかわし、名残りを惜し
みたかっただと思うことです。私は平素私位年を取ってから
親に死に別れても、さほど悲しくはあるまいと思っていま
したが、このように突然母に死に別れて見ますと、なか／＼
そういうものではなく、思い出されて来ることは生前母を
苦しめた不孝の数々のみで、今更どうして見ようもない不
孝の罪に涙するばかりであります。ところがこの不孝者の
私を最後迄我が子としていつくしみ、学務や寺務で多忙な
私を、その度毎に心から『御苦勞さんや、なあ』と言って必
ず慰めの言葉をかけてくれましたが、その言葉も永久に聞
くことが出来ぬことになりました。いつも放逸無慚に日を
過ごしている私共に、身を以て敵しい無常迅速じんそくの事実を教
えて、忽然ごつぜんとして母は浄土に還りました。これから後は唯
お念仏の中に母の言葉を聞くより外に道はありません。只
今私は母の棺前で勤行をしている間に心の中で次のように
母に向って語りかけておりました。「母上、本当に長い間
御苦勞様でした。不孝な私が次から次へと母上に背負わし
た苦悩の数々に長い間よく耐え忍んで下さいました。その

という院号法名を改めて本山から下附される伝達の式があ
った。私は会葬者一同に対して簡単に次のような御礼の挨拶
をした。「母は平常から『御開山聖人でさえ「それがし
閉眼せば屍を加茂川に流して魚に与うべし」と云っておら
れたのだから、寺に対しても、世間に対しても何の功勞も
ないこの私が死んだ時には、葬式は出来るだけ簡素にして
貰いたい』と申しており、又私共もその積りでおりました
が、皆様の御懇情に依りまして、若し母が生きて、ここに
いますならば、『これは一体誰のお葬式かいなあ』と驚く
と思う程の盛大な告別式を営むことが出来まして誠に有難
く、厚く御礼申し上げます。」

このようにして世間の母に対する告別式、母の世間に対
する告別は終わったのであるが、母のこの世に対する願いは
決して終わったのではなかった。母の心は私や私の子供の
身心の中に現に生き続けていることを知った。と云うのは、
東京から寺へ帰って一年にもなる長男が、それ迄一度
も本堂にお参りしようとしなかったものであり、そのことを
また母が死の当日、私に教えたのであったが、母の死後、
一日も欠かさず、夜の勤行を自ら進んで丁重ていじゆうにするようにな
ったからである。この不思議な現象に驚いた私は、弟に
向って「おばあさんは早や還相廻向げんそうえきこうの大活動を始められた
ぞ」と云った程である。人間の単なる欲望は未通みとほるもので

はないが、純粋な願いは、如来の本願がそうであるように、必ず末通るものである。私は母が私の長男にかけた願いは必ず実現するものと確信している。

あれから早や一年も過ぎて、既に一週忌の法要も終わった。併しどんなに年老いても、母はやはりこよなく懐しいもの、一週忌を過ぎた今になっても、母の突然の往生の当时を思い浮べて、不覺の涙を催す愚痴の身である。

母の生涯は誠に勞苦に満ちたものであった。曾て西田博士が哲学者ボルツァーノの自伝を紹介され、その中にボルツァーノがよく彼の母の生涯をあらわすものとして掲げた二句の詩がある。

我が喜は一、二、三、四

我が悲は涙の砂子に、空なる星数

この詩句はまた私の母の生涯にもあてはまる。母は若狭の山奥、平家の落武者が住みついたと伝えられる上中町河内の円成寺に遠山諦音の長女として生れ、十八才で私の父のもとに嫁いだ。八人の弟妹がいたが、すぐ次の弟諦観師を除いて全部若死してしまつた。その諦観師も一人残る姉のことを氣の毒がり乍ら、十数年前六十五才で亡くなつた。私の父は明治初年の西本願寺屈指の布教家として全国的に活躍した諦喜法師の長男として生れたが、年若くして

めていたかを知つて、今更乍ら私が不孝の塊りのような身であることを知らされた。

ともあれ四十才で夫を亡くした母には、私を頭として四人の子供と、小なりとはいへ一寺院とをかかえての悪戦苦闘が、それから改めて始まつたのである。晩年母は骨折つた自分の手を見ながら「よく働いてくれた手や、この手にお礼を云い度い氣持がする」とよく云つたものである。そのように苦勞して育てた子供等も、末娘は父の死の翌年十一才で脳膜炎で急死し、病弱の爲に独立する能力のなかつた三男は戦後榮養失調の爲、四十才で亡くなつた。後に残つたのは私と私の次弟だけである。その私は若い時から母に苦勞をかけるばかりで、戦後郷里に引きあげて母と共に暮した数年間を除いては、殆んど生涯母と離れて生活せざるを得ない状態にあつた。母が世間的に仕合せそうに見えたのは、私が三十五才の時庫裏の一部を改築して後、結婚した前後二三年のことであつたと思われる。至つて神経質で、氣の小さかつた母は、色々のことが苦になつたようである、私と弟の二人の嫁とも余り氣が合わなかつたようであるし、幼い時さん／＼苦勞をかけた孫達も、母のこれ迄の苦勞の片鱗も知らず、従つて母の言動を理解することが出来ぬまま、母に親しもうとしなかつた。晩年の母は精神的に孤独であつた。その孤独の中で母の信仰は深まつて行つ

死別した爲、十九才で母と結婚することになった。父は所謂おほつちやん育ちで經濟觀念に乏しく、例えば十圓の収入があると十五圓使つて平然としていたといつた性質であつた。その爲母は随分經濟的に苦勞したようである。私の中学時代僅か二圓の授業料を工面して仕舞つておくと、知らぬ間に父に探し出されて書店へ持つて行かれ、途方に暮れるといふようなこともあつた。併し晩年の父は、利井和上の感化に依ると聞いたように思うが、無我の念仏行者となり、平素父の口からは絶えずお念仏が流れ出ていた。その父も大正八年の二月、当時大流行した所謂スペイン風邪で、私の三高一年の折、四十一才で亡くなつた。愈々臨終になつて、一寸風変りな世話人の一人が「御院主の御安心を確めて来よう」と云つて、父の枕許に行き、父に向つて「おつらいことでしょうか、もうすぐこれですなあ」と静かに合掌して見せたら、父は苦しい息の下から、如何にも嬉しそうにニコリ笑つたと云う。「大往生！大往生！」と云いながら病室から出て来た世話人の大声を今でも覚えている。その世話人も既に亡くなつた。母が亡くなる当日父のことを云い出したのは、勿論父をなつかしんでのことであるが、それと同時に私に対して父を弁護したい氣持もあつたのではないかと思われる。平素私が不用意に口にした父の經濟的無能に対する愚痴が、どれ程母の心を苦し

たようである。私の不在中時折訪ねて、母と信仰を語り合つて慰めたのは私の弟だけであつた。寝たり起きたり状態になつてから、夜晩く母の部屋の前を通ると電燈がついているので、「睡れませんか」と云つて部屋をのぞくと、「ああ、睡れんので」と云つて熱心に仏書を読んでいた母の姿が眩に浮かんで来る。「沢山の兄弟に死に別れて、一人後に残ると長生きするといふから、おほあちゃんは少く共九十位迄は大丈夫ですよ」と云つていた甲斐もなく、「今になつてみると、この世よりもお浄土の方が賑やかなような氣がする」と弟に云つたといふ、そのお浄土に突然母は八十五才を一期として往つてしまつたのである。世の母はすべて皆このように悲しいものであるか。子を憶う母の姿を悲母とはよく云つたものである。今も仏間に母の古稀の祝いの時の大きな写真がにこやかにかかっている。この写真を見ると懐しさと不孝の悔いとに胸の迫るものを感じるのであるが、併しよく／＼思い返して見ると、これは業縁によつて現れた母の一时的な仮の姿に過ぎず、本当の母はいつも南無阿弥陀仏の御名号の中にいますのだと、しみ／＼思われることである。

成人する孫に

松村繁雄

今日は成人の日、戸毎に日の丸が揚って、文江さんは全
国幾十万の友と共に成人の日を迎える。

「成人」とは文江さんの「人間に生れた」という喜びの
達成であって、文江さんの「生きる」という喜びが、今日
からだんだんと発揮されるわけであるから、今日のお目出
度さというものは口では言えぬ。

文江さん、まことに／＼お目出度う。わたしは、父のな
いあなたに昨日までは「父」という責任に於いてあなたを
「教え導く」という立場にありましたが、今日からのわた
しは、若い世代のあなたにすべて導かれて行きたいと思
う。

それはどういうことであるかという点、軒下の巢に育つ
燕を見ていると、巢にある間は、それを保護するのは親燕
の責任であるけれども、さて羽毛が調うて巣立ちしたら、
大空は子燕のものである。どちらへ飛ぼうと、何処へ宿ろ
うとも、それは子燕の自由であって、それこそ子燕は幸福

く日です。どうぞ、たくましい誇りと自信を以て、羽根音
高く飛び立ちなさい。わたしの心も、今日は豊かな期待と
床しい信頼とが錯綜して、煮え湯のように音を立ててたぎ
ります。

振り返ってみれば、あなたの今日までの道は決して平坦
ではなかった。嬉しい時に、悲しい時に、友達はパパとよ
ろこびママと泣くの、あなたにはそれが無かった。友達
には心おきなくケンカの出来る兄弟があるのに、あなたに
はそれも無かった。

あなたは独り、もの言わぬ星を仰いで涙を噛みしめてい
た事をわたしは知っている。人には「朗かな娘」と誉めら
れたけれど、それはあなたの、天性の睿智によって偽装し
ていた笑顔であった事をわたしは知っている。ミー（猫）
を、タロ（犬）を、妹のように愛したのも、その淋しさを
させたことではなかったか。

奇しき因縁によって、わたしはあなたの「父」となった
けれども、あなたの、その淋しさを満たすにはあまりにも
無力であった。たとえば、漆黒の闇夜にいかにも松明を燃や
しても太陽の代りにはならないように、いかにわたしがお心
をつくしても、父亡き、母無きあなたの淋しさは満たし得
るものではなかった。

それなのに、あなたはよく耐え、よく忍んで、すく／＼

であるし、親燕も又満足であろうから。
文江さんよ、此世界はあなたの世界であるぞ、あなたが
自由に羽ばたく世界でありますぞ、どうぞ、自由にのび
／＼とお飛びなさい。

然し、大空には烈しい雷雨があり、鷹もおり鷲もおり、
子燕にとってはまことに危険な所であります。その中を無
事に飛ぶということはとても／＼容易ではありません、少
しの油断があってもならない、操縦をあやまると忽ちに墜
落します。わたしは親燕として、その事が心配でなりません。

雷雨の来る日、鷹のおる場所に就いては、わたしは親燕
の責任と経験に於いて、どこまでもあなたに指示してあげ
たい。わたしの明日からの命は、そのためにこそ必要であ
り明日からのわたしは、朝に夕べにひたすらに、あなたの
安全を願うことだけを生甲斐としたい。

文江さんよ。今日は、あなたが巣を離れて飛び立って行

と笑顔で伸びて今日を迎えてくれました。

立派でありました。健気でありました。降りかゝるまゝ
にまかせて、来る春の力を養う雪の松のように。

さあ、これからは飛べばよい。大空というところは独り
で飛ぶところ、高く飛ぶも、低く飛ぶも、それはあなたの
好みにまかせて、あなたの力にまかせて飛べばよい。

然しながら「何を自あてに飛ぶべきか」に就いては一応
の目やすをつけて置かねばなりません。「人生の目標」、
「生きる目標」は何か。これはむづかしい問題であるけれ
ども、しっかりと目標を定めておかねばなりません。

若し手近な幸福を求めて、享楽、安逸が人生の華とでも
考えるとしたら、それでは、折角「人間」に生れたのに、
「人間の尊さ」を喪失することになります。人間の、人
間たる光りは「靈性」にあります。

「靈性」とはどういうものか？それは「生かされてい
る」ことを知ることであります。「恵みの中、御恩の中に
育ちまれている我」を知ることあります。若し人にして
それを忘れたら、犬や猫と同じことになります。猫を見
よ、ネズミに満腹し、日向ぼっこを楽しむだけで「猫であ
る」ことを知らないし、いわんや、恵みも御恩も知りませ
ん。

ところが、当今は、科学はあっても靈性は隠れ、知識は

あるけれども智慧は失われている世の中であるから、その中であつて靈性にめざめるといふことは、木に登つて魚を求めぬよりもむづかしいであらう。

けれども、文江さんは、その失われた靈性を必ず取り戻さねばなりません。そこにあなたの、人間として生れた唯一の使命があり、それがあなたの、今日成人式を迎える唯一の目度さであります。

わたしは信じます。あなたは必ずその使命を達成するであろうことを、あなたの父が、姿は見えぬけれど、声は無けれど、常にあなたを、かくあらしめるべく護念してゐるであらうことを信じます。

わたしは既に七十、この肉体は明日は無常の風に消える身であります。けれども、仏縁多幸にして仏に逢ひ、仏に抱かれ、仏の久遠の光の中に生かされております。明日若し幽冥さかいを異にしましょうとも、わたしの願心はどこまでもあなたの上に還相して、飽くまでもあなたの靈性を護念するであります。

文江さんよ、人間は誰でも「智慧がある」と思ひあがつてゐるものでありますけれども、それは錯覚であつて、人間の智慧はまことに愚鈍でありますぞ、手前味噌に陥つてはいけません。必らず仏の教を聞かねばなりません。仏の

智慧の光りを仰がねばなりません。そこにただ一つの栄光の「道」があります。

文江さんの今日の輝かしい出発に當つて、よろこびにあふれて、すこし婆心を呈し、大いに前途を祝福いたします。

昭和四十二年一月十五日。

孫

築紫野春草

経読めるかたへに来てはわが幼遊べ〜と袖引きさそふ幼手を開くばらりが五つぞとわれに言ひきかすもつともらしく

自転車に乗せて走れば牛に馬にいち〜もの言ふわが幼子は

こと毎にわれ呼びわれにたよる故いとけなき子にかかはりくらす

幼な子はそと寄りゆけど大き下駄引きずる音に蜻蛉飛び立つ

かけという故自動車書けば「どっから来たどこへ行くのか」と稚子は問ふ

坊ちゃんが庭一ぱいに自動車書き通れざりしと翁笑ひ来久に食ふ魚がうましと我稚子は言ひふらしまはる夕餉の卓に

歌集・雲霧より

わがぎんげの記(上)

△自序▽

この手記は、長らく作りたいと思いつつ果しえなかつた私の分身作りの一部です。狭い私の身辺の人々や有縁の方方に読んで頂けたら嬉しいと思ひます。

幼時を、特殊な環境で不自然に育つた一精神病質者の典型と見る方もあります。宗教を、こんな変質者だけに役立つものと誤解されては困るとの苦情も出ましよう。真宗信仰からはみ出した異端ときめつけられるかも知れません。さもなければ、いま時めずらしい、古風な小人の繰り言と笑われるのがおちでしょう。

しかしこの私は、すべての人がそうであるように、現世では独特な他に代え難い一存在であることに間違いありません。このユニークな私を、最もよく知つてゐる私が自画像を描いて、有縁の方に見ていただくことは、人間像研究の一資料としても無意義なことではないと思ひ、敢てここに高賢を仰ぐ次第であります。

昭和四十一年六月六日

三 上 孝 基

私は、琵琶湖の西岸、滋賀県高島郡の一小村にある真宗本願寺派の寺院に、長男として生まれました。終戦前には約十年間、父の死後を承けて不在ではありましたが、名義ばかりの住職をして戦死者の葬儀には、その都度、名古屋から帰郷して導師を勤めたものであります。

元來私の両親は、どちらも養嗣家として他所から入居したもので、そのうえ私の数え年四才の時、火災のため本堂自宅ともに一切を失つたのみでなく、同じ年琵琶湖の大洪水に遇い、再び無一物の状態に陥りました。その後数年間は、両親の実家や京都の親戚をたよつて、親子三人が居候暮らしをしました。そしてやつと郷里に帰つて落着いたのは丁度私が小学校に上る少し前で、その頃には焼けた寺の再建工事も始つておりました。

ところが、私は十五才の春、膳所中学に入學して寄宿舎生活に入つてからは、殆んど郷里を離れて、家に居るのは夏冬の休暇の時くらいで、しかも宗教関係の学校には全然

縁がありません、しかし寺に生まれたという因縁で、仏縁を大切にしなければならぬという觀念は常に脳裡から去り切らず、一高時代は東京本郷の近角常観先生の許で、日曜日の法話会にはつとめて出席して講話を聴聞し、先生はじめ熱心な人々の信仰一途の生活にうたれて、自分も信仰を得て安心立命の境地に入れたらと、衷心願願しておりました。

その後、機が熟したといいますが、病気が縁となって二年ほど最後の学生生活を、先生が主宰された求道学舎に過ごした関係で、先生の薫陶を受け、歎異抄を通じて親鸞聖人の教に親しませていただくようになりました。

父もやはり湖東高宮の由緒ある寺に生れましたが、若い頃、暫らく東京へ遊学して、当時の東京英語学校に在籍し同時に杉浦重剛先生の称好塾に入っていました。また二十才に達していなかった父は、高宮の生家が、従来本願寺派の真宗学統の中心でありました関係で、その伝統を継いで将来仏学に精進するようとの一門の期待を担いながら、一面明治中期の日本国家の躍進期における中心地東京の華々しい青年学生達の意気や感慨に大きく影響せられて、宗門の出世間学と現実社会の世間学との二者択一の岐路に迷ったことは十分想像せられるところでありました。その父の内心を知った郷里高宮では、東京遊学は世俗の世間学のため父

がここにきざしたと言えましよう。また後年の病的ともいふべき罪悪感のもとここに根ざしているともいえます。

私は二十四、五才で学生生活の終りの頃ひどい神経衰弱にかかりました。医師はヒポコンデリーだから良くなっても、もう今後は余り頭脳を使うような仕事はしない方がよいと、心細い宣告を下しました。

しかし反って、この病気が機縁となって近角先生の教化にあずかり、おかげで入信の喜びを味わうことが出来たのであります。

自己の性格に対する嫌悪の情は、十四、五才の中学入学の頃一層著るしくなり、他人にこの弱味をさとられまいとする気苦勞はます／＼私を内閉的にし、また一面優越感を見失うまいと強いて見栄坊にもなりました。たえず自分を見破られないよう警戒し緊張しているので疲れやすく、時々ボンヤリ白屋夢をおう結果勉強がはかどらないなど、劣等感ひいては罪悪感すら生ずるといふ有様で、たえず不安焦燥の思いに駆られて苦しんでおりました。この久しく私を悩まし苦しめておりました自己嫌悪の情が、仏の慈悲によつて解消し救われたということは、精神衛生上から見れば一種のコンプレクスの解消に過ぎないかも知れませんが、私自身の主観的な経験としては、誠に大きい体験でありました。これこそ私には厳然とした救われの事実であって、

の前途を誤る怖れがあるとして、急拠呼び返し、やがてかねて姻戚関係にあった湖の反対側の一小寺に、養嗣として遣わされたのであります。若くしてこのように自分の意志を踏みじられた父は、生涯その抑圧から解放されることが出来ず、何かにつけて、宗門と国家、出世間と世間との間の矛盾と相剋に悩まされていたことは、今考えても同情に堪えません。しかし同じ悩みが私自身にもつきまといいたことは、奇しくもあり、また怖しいことと言わねばなりません。

私の幼少の頃は、自分の意志を無視され青雲の志もすてさせられた境遇に強いられた父は、おまけに火と水との二度の災難に会い、有形無形すべての青年らしい希望を失って、悶々に堪えなかったことと思われまます。後年父が私に、わしも寺を焼かなかつたら恐らくこんなところに辛棒してはいなかったらう、寺を焼いて建てて返さねばという確い責任感が起つて始めて腰がすわつた、と申しました。こんな心境の父の許に幼少時代を過ごした私は、性格形成の上にも父の影響を大きく受けて、ひと一倍神経質で子供のくせに大人のような心配や遠慮をするひねくれたところがありました。そのうえ転々と住居を変つたので同年輩の友達のない淋しい子供でした。この自分の性格が嫌やでたまらず、少、青年期を通じての私の最大な悩みのもと単なる精神衛生上の一症例ではありませんでした。

大正六年、私が数え二十五才で東京大学文学部二年でありました。冬の休暇を滋賀県の郷里で過し、東京に出て間もなく急に身体の具合が悪くなり、そのうち高熱に悩まされて病臥の身となりました。

元来、私は父の縁故で、中学三年の時上京して一高を経て大学を出るまで一貫して、東京並に高宮の前川家一統の恩恵をうけて、学資一切を給与されてきたものであります。一高在学時代から幾分でも自ら学資を補うつもりで、府立四中の深井校長の斡旋で住込みの家庭教師をしておりました。

当時は上大崎の小橋という内務省の官吏の家で、その長男の中学生の勉強を助けるため、同家の二階の一室に長男と同居して居りました。私の発病で、医師の招聘、看護万端お世話を頂きましたが、小心者の私には小橋家の迷惑がひし／＼と感じられて身の置き場がない思いでした。中学四年の時、湿性肋膜炎を患い、医師から再発すると結核になる怖れがあると注意されておりましたので、それが脳裡に強く印象されていきましたため、病名不詳の四十度近い熱が一週間も続いており、痰に血さえ交っているのです。つきり結核に浸されたに違いないとひとりで決めてしま

ました。するとますますこのまま小橋家に厄介になつて居ることが居りづらくなり、入院するには費用の途は無く、東京にこんなことを相談できる親戚も知人も見当らず、全く途方に暮れ、果てはじっと臥て居れない焦慮と悶々のうちに屋夜もわからぬ有様でした。

ところがいよいよ急性肺炎ときまり、即刻入院の必要があるとのことで、小橋夫人の計らいで赤羽橋ぎわの済生会病院に治療患者として入院しました。当時東京ではこの病院が唯一の施療病院だったようで、低所得者だけが入院という厳重な制限があり、従って入院患者は殆んど深川などの食民街の人々に限られておったようです。しかしさすが恩賜財団の経営だけあって、規模設備ともに市内有数の大病院で、医員も新進の腕利きの人が多かったようです。そんな結構な病院に無料で入院出来、しかも小橋氏が同会の理事であったので特別の個室に入れて貰いました。実に有難いことで小橋夫人の親切は心から感謝すべきであります。私の心中には甚だおだやかならぬ感情が湧いてきます。小橋夫人は早く厄介払いをするために、僕をこんなうす汚い貧乏人ばかり入る病院に入れたのだと。

この感謝と怨嗟の情が同時に表裏をなして起るのです。そして強い罪悪感に責められて、病氣のことなど忘れてしまふぐらい、この心中の相剋に悩みました。他人の親切や

家で時々顔見知りの病院の事務長さんに来てもらって、依頼する積りでしたが、これも音沙汰なしでした。反って翌日主治医から、いくら病人でもそんなえらい人々を呼びつけるような非常識を注意されて、可なり自尊心を傷つけられました。

罪悪感のものはなおきません。今度は病院に対してです。テラと見た書類で、私の住所が深川になって居ることを発見して強い屈辱感を受けました。そのほか医師や看護婦の態度や素振りが冷めたく、いやしくも皇室の御仁慈から生れた恩賜財団済生会にふさわしくないように思われ、これ亦純な感謝の念が湧いてこないのです。入院患者として、破格の優遇を与えられている自分を棚にあげ、反って正義ぶって、医者や看護婦の善意を疑うことの矛盾。われわれが幼い頃から培われて来た国体觀念や尊皇思想からみて、皇室に関する事柄に対して批判がましい考えをもつことは、当時の私としては許し難い不逞でありました。少くも現在、病室の居心地は決して悪くはない、若い医師や看護婦達も、入院資格の点で秘してあった私の学生という身分も解って、急に同情の眼をもつて見られるようになりますし、小橋家の光りで病院としての好意もだん／＼了解されて参りました。これらの恩恵が身にしみて解ればわかるほど、自分の内心の穢なさを、感謝の念の薄さが省みられて

好意を素直に受けて感謝するという純な心にどうしてなれないのか、と我れと我が身に愛想が尽き、悶々の情はますます猛り狂うて、到底このままでは安住しておれない。小橋夫人はさぞかし私を恩知らずと憎んでおられることであらう。病院から逐い出されるかも知れない、のたれ死に、死ぬことはよいが、恩に仇で報いるこの卑しい心の自分はどんな酬いを受けるのか、それからそれへと因果の車が悪い方へ／＼と廻っていく。思うことはそのまま実現するこゝとで、怖ろしくてたまらない。狂い死にする他はない、底へ／＼と駆け落ちる罪の思念を堰き止めたい、それには最初の誤りを正すほかは無いことに気付いて、小橋夫人に会って自分の醜い根性を洗いざらい告白し、夫人の心からの許しを受けることが必要である。こう気付くと今までの五里霧中の煩悶もやゝ落付いてきました。

ところが小橋夫人に直接会うことが先ずむづかしい。丁度その頃、廊下を通る見舞人らしい婦人を、フト半開きのドアの外に認めましたが、それが小橋夫人そっくりに見えて、トッサに私は夫人が見舞に来て呉れたが、看護婦から私の興奮状態をきいて会わないで帰ってしまったのだと速断しました。そしてまだ病院内に居られる筈だから連れ戻してくれと急いで看護婦に頼みましたが、事情を知らぬ看護婦は用を弁じてくれそうもありません。止むを得ず小橋自己の罪の深さにいよいよ恐怖を感じるようになりました。自責の種子が私の過去のこまごました行為の記憶から次から次へと蘇り返ってきて際限がありません。私は幼い時から父に対しては何となく心の距たりをもつておって、面従腹背の状態で心から打ち融けられないものがありました。折角父が苦心して選んでくれたものを気に入らないで、父を失望させるようなことが幼い時から少くありませんでした。このような些細な過去の出来事がまぎ／＼と憶い浮んで、すべてが私のひねくれた我が儘心に根ざしていることが自覚され、責め立てられるのです。自責の念が昂じて逐い詰められると、心が混乱し興奮が起り、その度がいよいよ高まり、遂に人事不省になる。その道程が精神的に何とも言えぬ苦しみと恐怖の連続でした。

熱が四十度以上に昇った病状の最高調の一夜など、恐怖の苦しさにさいなまれて暴れ出し、ベットからずり落ち、リノリユームの床の上を裸でのたうち廻って、ベットの鉄脚の車支えを手で捻じ折ったばかりか、握拳で壁に五センチ大のクボミを造るといふ狼籍をあえてするという始末でした。翌朝目覚めた時、自分の腕や脚がベットに縛り付けられて居るのを見つけて吃驚しましたが、看護婦から前夜の騒ぎの様子を聞いて、病氣とは言いながらもことに恥ずかしい思いをいたしました。後で聞きましたが、この時が

熱の分離期とかで、翌日は急に下熱して、精神状態もだいぶ平静になりました。

しかし罪悪感からの自責の念はおさまるところか、むしろ盛り返してくる有様で、死に対する恐怖感が更に頭をもたげて参りました。高熱で意識が朦朧としている頃は、死の問題など頭に浮かんできませんでした。解熱して病状が好転しかけて思考力や想像力が回復してくるとともに、私が平常自分にとって最大の問題として感じておりました「死後の自分」に罪悪感がからんで、一層切実な心の苦惱としてのしかかってきました。

寺に生れ十四、五才まで両親と共に仏様の御給仕をしてきたゆかりで、幼時から戒律的な仏教思想が素朴な形で頭のうちに染みこんでおり、地獄の責苦の絵図などが、うぶな脳裡に強く刻まれていたことは否めません。理性的にどんなに否定しても、これらの抑圧されていた幼時の恐怖心が時を得顔に意識に躍り出て抑えようとすればするほど、ますますはげしく、漠然とした罪悪感に唯さえ悩ま苦しんでいる私を際限もなく責めさいなむ有様は全く地獄の責苦でした。初期には薄暗い電灯の影に、幼時に見た恐ろしい鬼の顔が現われたり幽霊らしい姿が見えたりしたのですが後にはそんな感覚的なものでなく、どうしても逃れることの出来ない怖しさそのものの中にあるといった方が当って

ところが看病疲れの母は、久し振りに穏やかにになった私の様子に安心して病気が峠を越したためと思ひ、私の心のうちの悩みなど気付くはずもなく、一向真剣に私の気持ちに應對してくれない。やむなく次には主治医を掴まえて聴いて貰おうと頼んでみましたがこれも一向に取り合ってくれない。このT博士は富士川游先生の薫陶をうけた人だけあって私の再三の願いに忙しい時間を割いて十分間ばかりベツドわきに腰を下して聞いてくれました。おもに自漬についてそんなことは誰でもやっているんだ、罪悪でも何でもないと思いつめている自分の罪の深さまで掛け値なく相手に理解して貰わなければ、私の懺悔の真実が徹りません。

懺悔は相手にこちらの心の裏の裏まで見透して貰って、しかもわしはお前を見棄てないぞと保証して貰ってこそ安堵が得られるのです。私がこれまで口に出し得なかつた心の秘密を言葉で云い現わしたただけでは「君は呆れた奴だが俺だけは君を捨てはせんぞ安心せよ」と、これだけ云って欲しかったのです。そうすれば私の懺悔の真実が徹ると、その時は一途に信じ込んでいました。そこで、自分の悪さを理解してもらえないような悪行や背徳の材料が私の過去に見出し得ないことをむしろ残念に思いました。所詮、人間同士の間では、私の罪悪感に到底理解して貰えない。よし

います。

平素自閉的で、他人に打ち明けて気持ちるを軽くすることの出来ない自分をつね々あきたらなく思っておった私は「今こそ思いきって恥を忍んで懺悔しよう。吐き出さなくして積りつもっていた永年の澱を吐き出してしまふことが、今の苦痛から脱する唯一の途である」と、こんなことが浮かんで来た。現在の苦しみは決して今度の病氣や一時的の神経衰弱から来たものではなく、永らく私の内心で苦しみ悩んでおった心のガンである自閉的性格の最後の到達点であったのだ。この頑固な自閉の壁をひと思いにブチ壊したらキッとこの苦しみは晴れるにちがいない。ソーダ、心の澱を吐き出すことだ。秘していた罪を他人の前で告白し、懺悔して罪の許しを受けることだ。

こう気付くと急に救われた感じがした。では何を告白するのか、父に叱られて恨んだこと。小学校の頃友人にそそのかされて寺の賽銭を十銭二十銭盗んだこと、はては自漬行為まで一切を告白しよう。この決心は自分で自分の生命を断つほど重大に思われて、それだけに後は、よくぞ決心したと我ながらほめてやりたい気持ちでした。

ところが「誰に告白するのか？」告白の相手を選ぶようでは真の懺悔ではない、とまた一鞭加えられた感じで、まづ告白には一番苦が手であるかたわらの母を選びました。

言葉だけは理解されても、人間的な容認では私の苦悶は救われなかつたでしょう。

こうして折角一旦思い立った私の告白も救済のてだてとしては効果が無く、結局独り苦しみ悩みながら死んでいくほか致し方がないという絶望の境地に変わりはありませんでした。当時の私は死に直面しながら、死に対する心の用意は全然できておらず、無常感とが重なって心は焦るばかり全く気が狂いそうでした。

△続く▽

歎異抄讚仰歌

吉野秀雄

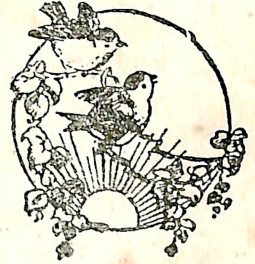
えにしありてこの夜の寒きはらわたに聖のことばし
みとほりつつ

若きより縮ぎなれし書なれど今宵のわれはおしいた
だきぬ

歎異抄読みゆくなべに上人の鏡の御影おもかげにた
つ

耳の底に留めしみ声にうながされ泣く泣く筆をそめ
し一卷

あとがき



○二月十五日は仏陀の入涅槃の日、各地に涅槃会の集いが催され、大聖を仰ぐよき機会がひらかれます。

釈迦如来かくれまして二千余年になり給う

正像の二時は終りにき如来の遺弟悲泣せよ

大聖の入涅槃を悲泣する遺弟の胸にこそ、如来常住の光は射してまいります。

娑婆永劫の苦をすてて浄土無為を期すること

本師釈迦のちからなり長時に慈恩報ずべし

お念仏の中に二千余年の時も何千里の距たりも消えて、「如来ここにいます」と驚喜させて頂くことであります。

○二月二十一日は、我ら日本人にとって忘れることの出来ない聖徳太子の忌日であります。祖聖もまた

和国の教主聖徳皇 広大恩徳謝しがたし

一心に帰命したてまつり奉讃不退ならしめよ

と御恩を謝していられます。混屯とした日本に整然とした国是を定め、枉れる者の救いを仏慈の無窮に見出される太子、そこから日本の黎明がひらけて参りました。

かねてから頂いておりました「わが懺悔の記」は、御自身の若き日の悩みを刻明に誌されたものであります。その悩みも深かっただけに近角先生にめぐり会われましたことは、文字通り「地獄で仏」でありました。三上様は只今は名古屋の衆善領の生みの親として、晩年を社会福祉の仕事に尽粹していられます。

明けて一昨年、母を亡くされた、向島様は、一年間は筆が重かったのですが歳末除夜の時に書き上げた草稿を頂きました。先年は川畑さんからお母さんを亡くされた直後の所感を頂きましたが、母と子との別離、まことに堪え難いものであります。

憶、然し母はこの世の姿を消して、子の心の中に永遠に生き、生涯の伴侶となって下さることをいよいよ知らされますことです。松村さんは、戦死された御長男の遺児、お孫さんの成人の日を迎えるにあたり、念仏裡に所感をのべられました。「真に人を愛するには、その人を真実に愛する人のふところにかえすことだ」と古人が語りましたが、無力で無慈悲の私共は、真実の大慈悲者に自らも帰し、かつ有縁の方々もそのふところに帰って下さることを祈念することだけが末通ることであります。

「生死の問題」は、真に生死に直面された方々の御心のままを私共の唯一の導きとして頂きました。そうした方々を真似する

のではなく、そうした方々を貫ぬく、大慈悲の仏心のたしかさを仰ぎましょう。業報は一人一人異なりますが、その一切をおさめとって下さる方は唯一無二であります。そのお方のたしかさ、周到さを頂きましょう。

御案内

○毎月第一、二、三日曜午後一時半、一道会例会。

市電新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目左入ル

○毎月二十四日午前、午後。昭和小校町教西寺法話会。

市電御器所通り下車、桜花学園東側。

定価 半年 二百円(送共) 一年 四百円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八 編集・発行人 花田 正夫

電話八二一七〇三七番 愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 入 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八 発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番